鴨東通信

夏

2014. 8 No.94

◉日常語のなかの歴史8
きのどく【気の毒】　中井精一

◉エッセイ
日中間を行き来する演劇　陳　凌虹
ミシンと迷子の私　岩本真一
史料から思うこと ―『通天楼日記』の刊行を終えて　冨坂　賢

◉リレー連載　世界のなかの日本研究18
在米ライブラリアンからみた日本研究　田中あずさ

◉史料探訪56
坂本龍馬自筆薩長同盟裏書　小森正明

思文閣出版

講座 日本茶の湯全史

茶の湯文化学会創立二〇周年記念出版　全三巻

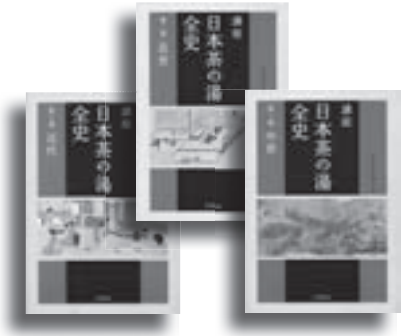
近年、茶の湯の歴史的研究は、著しい展開とともに、テーマは多岐にわたり詳細をきわめている。

本講座は、日本文化史の中に位置づけられた茶の湯の展開を、茶の湯文化学会が総力をあげ、最新の研究成果をふまえて通覧する。茶の湯の成立から近代までを見通した初めての通史。

さらに深く茶の湯研究を志す人にとってのハンドブック的な要素ももたせる。

◎編集委員会◎

代表　熊倉 功夫（静岡文化芸術大学学長）
影山 純夫（神戸大学名誉教授）
竹内 順一（永青文庫館長）
田中 秀隆（大日本茶道学会副会長）
谷端 昭夫（湯木美術館学芸部参与）
中村 修也（文教大学教育学部教授）
中村 利則（京都造形芸術大学教授）
美濃部 仁（明治大学国際日本学部教授）



▼四六判・各巻 平均三三〇頁

第一巻 中世　本体 二、五〇〇円
第二巻 近世　本体 二、五〇〇円
第三巻 近代　本体 二、五〇〇円

【全巻完結】　【6月刊行】

住友の歴史 下巻

朝尾直弘監修・住友史料館編集

近世初頭から銅の精錬を業とし、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の一典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。

連綿と受け継がれる住友精神の源泉がここにある。

内　容

第8章　イエの構成と組織
第9章　大名との交際
第10章　都市大坂が育んだ住友
第11章　文化と公共への貢献
第12章　幕末・明治の変革
第13章　近代化への対応
第14章　世界市場への参入
参考文献／住友家系図／略年表

▼四六判・三二二頁／本体一、七〇〇円

【8月刊行】

住友の歴史 上巻

内　容

1創業者の肖像／2東アジアの銅貿易と住友／3火と水と土石とのたたかい／4鉱山都市と積出港市／5銅貿易を支える仕組み／6銅の生産と関連諸産業／7住友の江戸進出

▼四六判・二八六頁／本体一、七〇〇円

日常語のなかの歴史 8

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

きのどく【気の毒】

国立国語研究所は、このほど二〇一〇年から実施してきた方言の全国調査を終了した。その結果、共通語への潮流は以前にもまして強まっているものの、依然、日本各地の方言は健在であることがわかった。

たとえば北陸地方では、「ありがとう」は、「きのどくな」という。この「きのどくな」は、人から品物などをもらうことで、相手に損をさせる、相手に気をつかわせたことをすまなく思う気持ちから発せられるが、「ありがとう」よりも自身の感謝の気持ちをより深く伝えられるという意識から、いまなお多くの地点で使用されている。

現代日本語では「きのどく（な）」は、他者の苦痛や困難なさまに同情して、自身の心を痛めることや様子を表わすが、北陸方言の「きのどく（な）」は、同じように他者の苦痛や困難なさまに同情し、心を痛めるのではあるが、他者の苦痛や困難の理由が自身にある場合に使用するという点で異なっている。

あまり知られていないが、「きのどく（な）」には、その対になることばとして「きのくすり（気の薬）」というのがあって、これは気を晴らす種となるもの、おもしろくて心の慰めになること、といった意味をもっている。「きのどく（な）」も中世から近世前期までは、自分の心や気分にとって毒になるもの、自分の心を痛める種となるものといった意味で使用され、現代語のような他者の苦痛や困難なさまに同情して、自身の心を痛めるような用法ではなかった。

ところが、近世後期ころから、他者の苦痛・不幸の原因は、自身にある場合に「きのどく（な）」を使用するようになり、やがては他者の苦痛や困難なさまを同情して心を痛めることや様子を表現する用法にうつっていった。つまり、北陸地方で使用される用法は、近世後期にさかのぼる用法で、現代の用法に先立つ古い用法といえる。

宣長は、『玉勝間』で「すべて田舎には、いにしへの言の残れること多し」と記しているが、「きのどく（な）」もその典型的な一例といえよう。

（中井精一・富山大学人文学部教授）

エッセイ

日中間を行き来する演劇

陳　凌虹

緑が青く茂る六月となって、中国の大学ではちょうど卒業論文の審査や卒業式がおこなわれる時期にあたる。今年指導した論文のなかに谷崎潤一郎『春琴抄』の越劇版「春琴伝」のヒロイン像の変容を論じた一篇があった。

「春琴伝」（脚本：曹路生、演出：郭暁男、主演：蔡浙飛、章益清）は二〇〇六年に「中国浙江小百花越劇団」によって中国で上演され、多大な反響を呼び、若者をふくむ多くの観客に感銘を与えた。盲目で美貌の主人公春琴に仕える奉公人佐助が、春琴の面影を脳裡に永遠にとどめるため、みずから盲目の世界に入るという愛と献身のストーリーである。粗筋は原作のままであるが、原作にあるサディズムとマゾヒズムの代わりに春琴の純情が強調され、完全に春琴と佐助のロマンチックな恋物語になっている。

越劇は中国浙江省嵊州に起源をもち、一九一〇年代から上海に入って、そこで栄えていた各種の演芸の精粋を吸収することで完成された歌劇であり、中国「第二の国劇」（第一は京劇）とも称される。さらに、一九二〇年代以降、越劇はすべて女性の役者によって上演されるようになり、日本の「宝塚歌劇」と共通した性格が見られる。そのため、近年ジェンダーや比較演劇学の角度から比較研究が試みられている。

宝塚歌劇は今年一〇〇周年を迎える。二〇〇二年に修士課程に在学していた筆者は、宝塚歌劇団による「蝶・恋」（作・演出は植田紳爾、主演：香寿たつき・檀れい）を目にしたことがある。それは日中国交正常化三〇周年の記念活動の一環として北京の世紀劇院でおこなわれた上演で、中国の物語『梁山伯と祝英台』を平安時代の日本に移し、歌舞伎「けいせい倭荘子」、日本舞踊「蝶の道行」を取り入れた舞踊劇であった。『梁山伯と祝英台』の粗筋は以下のとおりである。

東晋の時、浙江上虞の祝家の娘である祝英台が男装して遊学に出た途中、会稽から来た梁山伯に出会い、ともに杭州で三年間学び親友となったが、英台が女の身であることはずっと秘密のままであった。その後英台は家の事情で学業をやめて里に帰り、無理やり馬文才と婚約させられる。英台からの愛のしるしをもらった梁山伯は英台に会いに行ったが、そこで真相を知り悩み死んでしまう。英台が嫁ぎに行く時に梁山伯の墓を通りかかると突然墓

が割れ、英台はそのなかに誘われるように入っていき、やがて二人の化身かのような二匹の蝶が舞い上がっていく。「蝶・恋」の日本色豊かな着物、舞踊、音楽によって構築された豪華絢爛な舞台は深く印象に残った。

この夏、拙著『日中演劇交流の諸相――中国近代演劇の成立――』が思文閣出版から上梓される。日本の明治期、中国の清末民国初期における日中演劇界の緊密な連携関係、とりわけ中国の近代演劇の成立に果たした日本の役割について、日中現代劇の先駆けである文明戯と新派演劇の関係を中心に、多数の新史料と具体的な事象（人物の往来、脚本の翻訳、舞台芸術）を通して総合的に論じてみた。時代は日本の明治期、中国の清末民初期にさかのぼるが、拙著で描こうとしたのはまさに上述したような日中間の演劇文化の交流である。たとえば、中国人留学生によって東京で創立した春柳社をはじめとする文明戯劇団は、「不如帰」など、当時の日本新派演劇のメロドラマを多く翻案・上演して、中国の舞台で花を咲かせた。また演劇人任天知は京都法政専門学校（立命館大学の前身）・東方語学校の中国語教師として長らく京都に滞在しており、そこで接した時代風潮および新演劇は、帰国後彼が革命演説を織り交ぜた演劇をとりあげる原動力となった。

拙著は、これら二〇世紀初頭日本に留学・滞在し、日本の新しい演劇を学び中国に導き入れ、中国の近代演劇を勃興させた中国演劇人群像でもある。彼らは「誓度衆生成仏果、為現歌台説法身（衆生を悟らせて済い出すため、身をもって舞台に現して説法する）」（李叔同）のように、演劇による民智啓蒙のために舞台に立ち、劇団の経営が悪化しても「総有弁法的（方法は必ずあるよ）」（陸鏡若）と、粘り強く演劇に献身的に尽くした。彼らは一つ一つの小さな舞台で演じた小さな役を通して、東アジアの歴史変動という大舞台において大きな役割を果たし、中国の演劇改革を遂行したのである。

日本の新派は新しい演劇を創造することを目標としつつ、歌舞伎を基礎として出発しており、その芸は伝統演劇と近代演劇双方の多様な表現を兼ね備えている。文明戯は伝統演劇の要素を継承しながら、日本の演劇から多大な影響を受けており、新派への傾倒、新劇への接近が同時に見られる。このような日中両国の新演劇の誕生と発展は常に近代国家の歩みに同期し、また「承前啓後（過去を受けて未来を開く）」の役目を担い、伝統演劇改良の大きな推進力となったのみならず、その後の本格的な近代劇の誕生をも育んだといえる。さらにいうと、上海近辺の地方劇――滬劇、甬劇、そして先にふれた中国「第二の国劇」越劇は、元来地方の説唱演芸（語りと歌が入る芸能）であったが、近代以降の人口移動にともなって上海に進出し、上演されていくうちに文明戯の影響を受けて、演芸から演劇へと発展したのである。このように、昔も現在も演劇は、翻訳者、演出家、俳優の仕事によって日本と中国のあいだをスムーズに行き来し、国や民族や言語、そして時空の壁をこえて両国の観客を魅了し続けている。

（華東師範大学専任講師）

エッセイ

ミシンと迷子の私

岩本真一

このたび、思文閣出版から『ミシンと衣服の経済史』を刊行した。研究に調子が出始めたのは二〇〇六年のことである。こちらでは、その年に経験したいくつかの「迷子」について書きたい。

これまで私が学会で報告したのは、社会経済史学会の全国大会と近畿部会、日本衣服史学会の全国大会、そして大阪歴史学会の近代史部会（三回）の合計六回である。このうち、会場へ向かう途中に迷子になったのが二つの全国大会である。

まず、二〇〇六年九月の社会経済史学会。会場の関西大学へは、自宅最寄り駅の地下鉄御堂筋線「あびこ」から動物園前駅で堺筋線に乗り換え、関大前駅で降りれば良い。それだけのことである。しかし、私はあろうことか、一つ手前の天王寺駅で「乗り越した」と思い、引き返した。気づけば昭和町駅であった。五〇〇枚を超えるA3用紙を詰めた段ボールを抱えながら、御堂筋線を行ったり来たりした。

次に、同年一〇月の日本衣服史学会である。会場のノートルダム女子大学へは、当時の恋人であった日本人女性に携帯メールで案内してもらい、一〇時開始の一時間前に地下鉄烏丸線北山駅で下車した。さっそく駅前の喫茶店でモーニングを食べながら、一五分×二回の脳内練習を行ない、清算を済ませた。

手前の門をくぐり、薄暗く狭い玄関に入った。その時、どこかで見た光景という感覚（デジャ・ヴュ）に襲われた。大学なのに玄関があり、土足厳禁である。入口に向って左には頭がギリギリ入る窓があった。事務室らしい。

学会会場の案内が一つもないので、小さな窓に頭を突っ込み、「すいません、日本衣服史学会の会場はどこですか」と尋ねた。そこはノートルダム小学校だった。それを知った途端、八〇〇メートルはあるらしい女子大まで全力で走った。報告開始一〇分前のことであった。

二つの迷子が重なった二〇〇六年、私はさらに大きな迷子になっていた。その年の二月、私は在日中国人女性に振られた。彼女は一人息子を大学にまで行かせた年上のシングル・マザーであった。

未練がましく彼女の故郷を知りたくなり、九月の社経史報告の翌日、私は中国黒龍江省のハルピン市とチチハル市を訪ねた。

旅行案内書で絶景とされる小さな雪山がチチハル市の大乗寺付近にあると知り、地図帳のコピーを持ってホテルから歩き始めた。地図では五センチの距離だったので楽々到着するだろうと思ったのが、間違いであった。縮尺を見ていなかった。

一時間半歩いても到着する気配がない。とあるアパートの前で編物をする老人女性に現在地を尋ねると家具工廠街とのことで、地図ではまだ半分（二・五センチ）しか進んでいないことがわかった。結局、出発から三時間半ほどで到着した。

せっかくなので大乗寺を見て回った。出た所で、露店のおばさんたちに「この寺の近くに綺麗な雪山があると聞くが、見当たらない」と筆談で伝えた。返答は簡単であった、「今は九月、雪山は冬。あなたが見たい小山はあれ」とハゲ山を指された。

辛うじて連絡を続けていた元恋人にこの一連の出来事を話すと、大乗寺には彼女の父が眠っているとのことであった。

今、私には二人目の妻がいる。部屋では本縫ミシンとロック・ミシンが賑やかに動き、旗袍やアオザイが並んでいる。これまでの恋人たちと同様に、彼女の人生にも色々なことがあった。

近現代史を振り返っても、女性の人生はさまざまである。家庭を築いた女性もいれば、何らかの事情で家庭を築かない（または築けない）女性や、途中で家族や家庭を失った女性もいる。しかし、どのような人生を歩もうと、世界中の女性たちは家や工場でミシンを踏んできた。

ところで、一九世紀米国における実用化以後、家庭用ミシンと工業用（工場用）ミシンとの区別は意外に曖昧であり続けた。この経緯を近現代女性史に重ね合わせたとき、私は「家庭」と「家」とを区別することが大切であると考えるようになった。

戦前期の文献に「家庭用ミシン」や「家庭向けミシン」の言葉は散見されるが、拙著では文献を説明する箇所を除き、私自身の言葉としてこれらの言葉を使用することを避けた。あえて「家向けミシン」と記した場合もある。

そして、家という言葉にこだわることで、物的基礎を持つという理由から工場と比較検討がしやすくなり、その結果、家と工場とは厳密には区分できない場合があることがわかった。

近年、ミシンに関する歴史研究が注目され、それを用いた家庭主婦像が広く知られるようになった。この潮流に対し本書は「家」に依拠し、そこが家庭にも工場にもなった姿を活写した。

私の半生を突き動かしてきた原動力は「女好き」、これに尽きる。だからこそ私が注視すべき視野は家庭に限定されてはならない。生産拠点・作業場としての家（と工場）に注視した所以である。

とはいえ、戦前期の女性たちに踏まれてきたミシンの大半は米国企業一社の製品である。この事態を思い返したとき、今なお私は嫉妬に近い複雑な気分になる。

女性たちを突き動かしたミシンと女性たちに突き動かされた私、不思議な巡り合わせである。

（大阪経済大学日本経済史研究所研究員、同大学他非常勤講師）

エッセイ

史料から思うこと ――『通天楼日記』の刊行を終えて

冨坂賢

本年三月、横浜美術館の柏木智雄さん、江戸東京博物館（元東京都写真美術館と言った方が通りがよいだろう）の岡塚章子さんと共同で、『通天楼日記――横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷――』を世に出すことができた。そこで、思文閣出版から本誌にエッセイを寄こすようにとの依頼がきた。

しかしである。本書で取り上げた史料の歴史的・学史的位置づけについては、宮地正人先生から頂戴した「推薦のことば」が要を摘んでお示しいただいている。また写真館兼私塾である「通天楼」を興し、日本写真史黎明期に重要な足跡を残し、本史料を含む様々な貴重な資料を残した横山松三郎（一八三八～八四）の生涯については、本書に収めた岡塚論考「横山松三郎事蹟――横山家所蔵資料を中心に」が緻密に後付けている。さらに、写真のみに止まらず洋画や印刷といった「複製作成技術」を文明開化期の東京で広めた通天楼に集った人々については、柏木論考「通天楼をめぐる人々――洋画とのかかわりを中心として」がその時代的熱気を伝えている。これらは、ぜひ一読してほしい。

ひるがえって筆者である。出版につきものの苦労話をここでしても仕方がない。また収録した諸史料を読み解く作業は、筆者なりに一文を寄せたが、それは今後の歴史学・写真史学・美術史学の碩学によって行なわれることを期待するものである。責任逃れのようであるが、もともとそのような意図であったし、先に述べた岡塚さんと柏木さんの論考が見事に先陣を切っている。

筆者がなにか述べることができるとすれば、明治初年の東京で、写真という新技術を軸に交差する人間群像が、実に泥臭くもあり、また写真術を習得することが、生きるための糧となっていたことである。それは史料に直接触れて、翻刻に携わった者が得た実感でもあった。このようなことは、おそらく学史的に問われる内容ではなかろう。しかしながら、なにがしかの新事実の発見や、学史的に重要な事項が確認されることのみが、一級の史料であるかないかの線引きではないはずである。

たとえば、共に最初期写真界の重要人物である内田九一と横山松三郎の、ウィーン万国博覧会出品写真の提供価格をめぐる丁々発止のつば競り合いなどは、これまで問われたことはないだろうが、すでに一社を興した当事者からすればごく当然のことである。

自身の立場や名声にも関わろうが、それぞれ養うべき家族や門弟がいたことは、よくよく理解してかからなければならない。だからこそ、通天楼に収納・管理されていた写真原板を、許可なく某人が持ち出した事件（明治六年八月二十六日）は写真館営業の存廃に関わるため、通天楼社中あげて猛追するのである。

ところが、経営者というよりは研究者の肌合いの強い松三郎は商才に長けているはずもなく、通天楼の屋台骨を支えていたのは門人の宮下欽であった。新技術の習得に並々ならぬ情熱を傾けた松三郎の傍らで、金策に走り回る彼の心労はいかばかりであったろうか。それはさすがに松三郎も諒解しており、だからこそ彼の書簡に短く「宮下君江宜敷（よろしく）」とある言葉が意味を持つのである。その宮下欽が、晴れて国元の信州松代に写真機材の一切を携え帰郷したことは、いわば修業の成果を示し、故郷に錦を飾るものであった。しかし当時、関西方面に出張中の松三郎は、頼んでいた物資の到着が遅れていたことに腹を立て、自分の留守中に無断で出立したとして「一同不埒」と家族を叱る。これでは宮下欽はたまったものではなかったろう。

松三郎の癇癪持ちはこれに止まらない。明治七年の新年を迎えるにあたり、家族の者の手違えで餅が配達されず、あまつさえ一日ごとに十八人分の雑煮を三箇日届ける注文を間違えて、一日に五十五人分が届いてしまった。松三郎はこの有様に、「内のしまりなきハかくもあらんか」と嘆き、日記に「よそからハうまき雑煮をはこ（運）ひしに　たゝくそにする内のこしぬけ」と書きなぐる。注文を忘れ、間違えた者もまた間違えた者だが、筆者はそこまで言わずとも、と思ってしまう。

こう書いていくと、横山松三郎は随分身勝手な人物にとられてしまいかねないが、けっしてそんなことはない。家族、門人、同業者、取引業者、また使用人にいたるまで心を砕く人であった。そのことの一端は筆者の小論に記したつもりである。また写真で身を立てる前の箱館時代には、祖父文六のように高田屋嘉兵衛の場所請負に功を挙げることもできず、時季の影響を受けやすい漁師相手の商売に「かれをせむれハ、彼又今日の生活いかにせん」と考えてしまう人であった。商才がなく現実的ではないと言ってしまえばそれまでだが、他人を傷つけることができなかったのであろう。それは自身に厳しかったことの裏返しである。だから自身の手記に、「年四十三才也、人初老の際に至り一廉（ひとかど）の功なきを」と記して締めるのであった。

さて最後に私事で恐縮だが、『通天楼日記』編集最中の昨年十月、筆者は東京国立博物館から九州国立博物館に異動となった。九州といえば海外に開かれた窓口・長崎を有し、また薩摩や肥前のような開明的な藩主をいただいた諸藩において幕末期に西洋文明の積極的摂取がみられた。写真術も、もちろんその中の重要な出来事である。筆者は東京で横山松三郎と出会ったわけだが、「年四十三才」をとっくに過ぎた今、これからどんな出会いがあるか、「一廉の功」を成し得るか楽しみにしている。

（九州国立博物館学芸部文化財課長）

在米ライブラリアンからみた日本研究

田中（たなか）　あずさ

私は米国ワシントン大学図書館でJapanese Studies Librarianという職に就いている。この立場から観察する「世界の中の日本研究」を少し語ってみようと思う。

私は「サブジェクトライブラリアン」として、担当学部・学科（私の場合は日本研究）のために、蔵書構築、資料購入の資金集めを含む予算管理、レファレンスなどを担当している。選書にあたって、まずは担当学部の教授陣や大学院生達の研究テーマの把握が必須だ。彼らの研究に必要な資料が選書の最優先だからだ。そのために、教授陣達と面会したり、彼らの著書や論文などの出版物を読んだり、時には食事や映画に出掛けたりして彼らの関心事を知るようにしている。また、学生達とは日々のレファレンスや、月に一度のコーヒーアワー（毎回数人の学生が自分の研究テーマについて他の参加者にシェアする会）を通して、彼らの研究のテーマや進捗状況を把握するように努めている。また、アジア学会や学内シンポジウム、公開講座の類にも出席し日本研究の動向に通ずるようにしている。こうして、利用者が今後必要とするであろう情報や資料に見当を付けて蔵書構築に着手する。利用者の研究テーマは日本の出版社の方々とも（研究の内容を明かし過ぎない程度に）共有し、有用な資料を推薦していただいており大変感謝している。

ライブラリアンとして日本研究を観察していて気付くのは、研究分野や研究方法が多様化していることである。日本研究と言っても、日本の文学や宗教をアジアの他地域のそれらと比較研究したり、それらがアジア及びその他の地域でどう研究されているか比較することもある。また最近はデジタル人文学も進み、例えば、疫学の研究者が、大量の史料（当時の日記など）から日照量の悪さを割り出し、当時の疫病の蔓延及び病死者数増加の原因解明を試み、人口の急変動を分析している。また、アメリカの地震研究者が、古くから記録を続けている日本の地震資料を遥か太平洋の東岸から利用したりといったことが可能になる。図書館の利用者達が分野の枠組みを超えて研究を始める時、ライブラリアンのネットワークは有用である。ワシントン大学の図書館には約五〇人のサブジェクトライブラリアンがおよそ一八〇の研究領域に対応しており、ライブラリアン同士が協力して多分野にまたがる研

究の支援を可能にしている。例えば、ドイツと日本の戦後保障の比較研究をしている研究者がいるとする。日本の分野や文献に関しては日本研究担当の私が対応し、ドイツ部分に関しては、ドイツ研究のライブラリアンにお願いするのである。また日本の教育政策について研究する学生がいる。日本の教育史や統計などの資料は私から提供できたが、教育法や政策の改正については、法学図書館のアジア法専門のライブラリアンに交代した。

さて、ワシントン大学には法学、物理、芸術、などの学部図書館が一〇以上ある。私が勤務する東アジア図書館もその一つで、日本研究、中国研究、韓国研究を支援する。中国・韓国研究のサブジェクトライブラリアンと協力しながら日々働く中で、それらの地域と比較して日本研究の特徴が見えることがある。

例えば、日本研究を支える日本資料の電子化の遅れである。去年の夏、利用頻度の少ない参考図書を閉架書庫に移動するプロジェクトがあった。中国や韓国の図書はすでに多くが電子化されているので、参考図書が閉架に移動されてもオンラインで見ることができる。しかし、紙の資料に頼っている日本研究者には紙資料が閉架書庫へ移動されてしまうのは致命的である。日本関係の参考図書は簡単に動かせないので、他のライブラリアン達と足並みが揃わない。また、日本の資料の著作権法がアメリカの大学の教育システムにそぐわない場面にも遭遇する。アメリカの多くの大学図書館は、授業の課題用資料（論文、視聴覚資料、など）が、授業のオンラインコースページからのアクセスに協力している。この際、著作権のクリアランスは科目ライブラリアンが担当するので、日本の資料の掲載時に連絡が入ることがある。先日も日本のテレビ局が製作した古典芸能関係のＤＶＤをストリームに載せたい教授がいたのだが、著作権が問題となり叶わなかった。こうなると学生は他の授業のように手軽に課題ＤＶＤを観ることはできない。また、日本研究に関しては、図書館に対する本国からの支援も中国や韓国に比べて異なるように思う。例えば韓国財団は北米で韓国研究を支援する図書館に対して韓国の電子資料購入の資金的援助や資料の寄贈をしている。韓国中央図書館は韓国語を母国語としない韓国科目担当のライブラリアン達を世界中からソウルに招き、韓国研究に有用な資料やサービスを英語で紹介する研修を数年に一度開催しているし、奎章閣韓国学研究院は同様のライブラリアン達を対象に韓国学研修を開いている。台湾や中国はこのような研修こそ無いものの資料購入のための資金援助を行っている。こうした支援はもともと日本が行っていて、韓国・中国・台湾の支援のモデルだったそうだ。

以上、ライブラリアンの立場から、米国の一大学における日本研究の動向を紹介した。今後の日本関係資料を取り巻く状況に注目していきたい。

（ワシントン大学　東アジア図書館・日本研究司書）

史料探訪 ⑤⑥

坂本龍馬自筆薩長同盟裏書

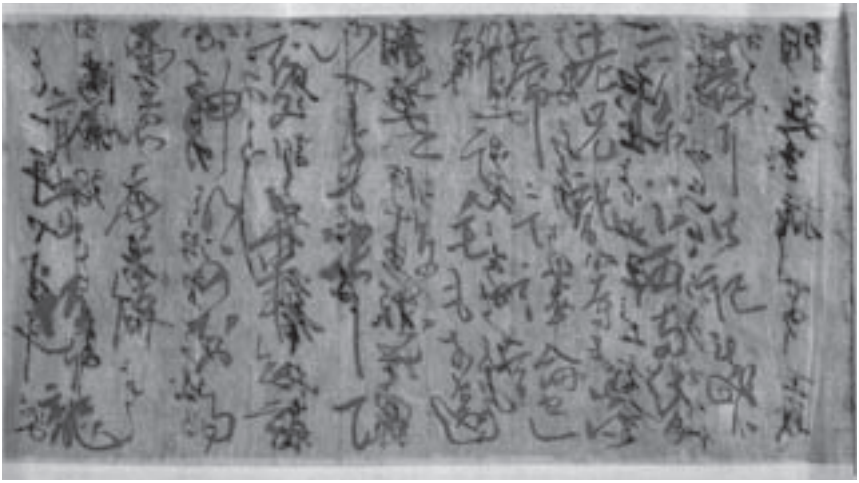
小森正明
（宮内庁書陵部図書調査官）

今年の四月、京都に所用があり、そのおり思いたって霊山の坂本龍馬や中岡慎太郎をはじめとする幕末の志士達の墓に詣でた。いままで京都には何度も足を運んでいるが、残念ながら一度も霊山を訪れる機会がなかったのである。私は、幕末史の研究者ではないし、幕末史の知識もそれほど持ち合わせてはいないが、吉村昭氏の『桜田門外ノ変』（新潮文庫）をはじめとする一連の幕末を題材とする小説に慣れ親しむうちに、多少幕末史にも関心を持つようになった。

また、私の勤務先である宮内庁書陵部には、図書寮文庫というセクションがあり、いわゆる古典籍や古文書など約三一万点の図書を公開している。これらは、御所本とよばれる皇室伝来のもののほか、有栖川宮・伏見宮などの旧宮家、九条家や柳原家などの旧公家、紅葉山文庫など旧江戸幕府、新井白石・古賀精里などの学者のもとにそれぞれ伝来した図書が主たるものである。なかには幕末から明治にかけて活躍した木戸孝允の伝記『松菊木戸公伝』（昭和二年〔一九二七〕刊）編纂に使用された木戸家文書などもある。仕事柄、木戸家文書などの幕末・維新期の図書に接する機会も多く、これも私が幕末史に関心を持つにいたった理由なのかもしれない。

この木戸家文書の中で特に有名なのが、坂本龍馬が慶応二年（一八六六）二月五日に薩長同盟の保証をしたとされる自筆の裏書である。平成二二年（二〇一〇）のＮＨＫ大河ドラマ「龍馬伝」の中でも福山雅治さんが演ずる龍馬がこの裏書を書くシーンがあったらしく、この年の九月～一〇月にかけて、宮内庁三の丸尚蔵館を会場として、書陵部と三の丸尚蔵館との共催「皇室の文庫―書陵部の名品―」展にもこの裏書が出品されたため、連日多くの方々がこれを目当てに来場され、坂本龍馬の人気ぶりを目のあたりにするところとなった。

龍馬の裏書ばかりに関心が向くことが多いが、この表面は、薩長同盟に関わる六箇条を木戸孝允が書いた書状で、木戸が龍馬に充てた書状の裏に、朱墨を以て龍馬が自筆で裏書したのである。そして龍馬から木戸に送り返され、その後永らく木戸のもとで保存されてきたのである。この裏書は、幕末史を主たる内容とする啓蒙書などには必ずといっていいほど図版として掲載されるが、



坂本龍馬自筆薩長同盟裏書（『木戸家文書』４２１巻のうち〔天４７〕、函号Ｆ１－５）

肝心の表の六箇条は、歴史的に重要であるにもかかわらず、意外にも全文が写真で紹介されることは稀（長文のためであろうか）なので「皇室の文庫―書陵部の名品―」展の図録には書状全文の写真を掲載した。

それで気づいたのが、この裏書は、同盟六箇条のうちの第三箇条から第五箇条あたりに書かれていることである。もちろん、龍馬は六箇条の真ん中あたりに裏書をしたといえるのであろうが、画像全体を見ることによって様々な想像も膨らむことを再認識した。また、龍馬は表面には一切書き込みなどをせず、裏書の文言と干支・月日・自身の署名のみで済ませている。また裏書は「神明の知る所ニ御座候」と結んでおり、起請文（きしょうもん）に近い様式とも考えられる。朱墨で書かれている点や起請文に近い様式といい、龍馬がこの薩長同盟の保証・維持にいかに心を砕いたのかが原本をみることによってひしひしと伝わってくる。

しかし、この六箇条は木戸が記憶を頼りにまとめたものといい、龍馬に確認をもとめ、それに応じて龍馬が裏書したと考えられている。つまり木戸は、薩摩藩側にはこの六箇条の確認をもとめていない。また薩摩藩側にはこの六箇条は伝わっていないとされており、薩長同盟にはまだまだ謎があるような気がしてならない。ただ最近、この同盟をめぐる新たな事実の発掘や新説が提起されているといい、今後議論が深まることを期待している。

龍馬の墓から坂道を下っていくと、小さな休憩所があり、ベンチに座って眼下に広がる京都のまちを一望し、当時に想いを馳せ

た。ふと右手をみるとそこには吉村寅（虎）太郎の墓碑が建っていた。吉村が天誅組総裁の一人であったことは、森銑三氏の『松本奎堂』（中公文庫）によって知っていたし、この旅にはたまたま大岡昇平氏の『天誅組』（講談社文芸文庫）を持参していたので不思議な縁を感じた。もしかするとこの一冊の文庫本が、私をこの地に誘ったのかもしれない。

最近、龍馬自筆の書状がテレビ番組の取材中に発見されて話題となったが、まだどこかに眠っている龍馬の書状が、今後発見されることがあるかもしれないなどと思いつつ、霊山を後にした。

この木戸家文書を所蔵する図書寮文庫は、平成二五年（二〇一三）一一月より宮内庁のホームページ上で所蔵図書の目録検索と画像公開システム（http://toshoryo.kunaicho.go.jp）を稼働させたが、画像のほうはなかなか増やすことができず、多くの方々からお叱りをうけている。現在、この龍馬の裏書を含む木戸家文書（四二一巻）のインターネット上での画像公開を見据えて作業を行っている。電子データの作成には、既存のマイクロフィルムを利用するためカラー画像ではなく、龍馬の裏書もモノクロ画像での公開となってしまうが、およそ四〇〇〇通ともいわれる幕末・維新期の志士達の筆跡を、近い将来にインターネットで閲覧していただけるようにと考えているところである。

— MEMO —

宮内庁書陵部　図書寮文庫

代々皇室に伝わってきたものを中核とする古典籍・古文書類を所蔵しています。当文庫の古典籍等の閲覧・複写利用を希望される場合のお問い合わせは、左記へお願いします。

【閲覧申請書送付先・照会先】
〒100-8111　東京都千代田区千代田1-1
宮内庁書陵部図書課図書寮文庫出納係
電話 03-3213-1111（代）（内線3439）

【利用資格】 特に問いません。

【閲覧手続】 閲覧希望日の10日前までに届くように、住所・氏名・電話番号・閲覧希望日・資料名の各事項を記入した閲覧申請を図書寮文庫宛に郵送し、閲覧許可を得てください。
詳しくは、宮内庁ホームページ「皇室に伝わる文化：書陵部所蔵資料→図書寮文庫について」又は「宮内庁：各種申請手続→図書寮文庫」を御覧ください。
http://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/shinsei/toshoryo.html

【閲覧時間】 午前9時15分から午後4時30分まで
（ただし、正午から午後1時及び午後4時から午後4時30分の時間帯は、資料の出納は行いません。）

【閲覧休止日】 日曜日、土曜日及び祝日法による休日。毎月第2・第4金曜日。年末年始（12月20日から1月10日まで）。その他法令により休日に定められた日。行事等により、閲覧業務に支障のある日。

書評・紹介一覧　4～6月掲載分	※（評）…書評（紹）…紹介（記）…記事〔敬称略〕
牛と農村の近代史	**摂関院政期思想史研究**
（評）『芸備地方史研究』290号（平下義記）	（評）『宗教研究』88巻1輯（前川健一）
写しの力	**朝鮮独立運動と東アジア**
（紹）「図書新聞」6/21	（評）『歴史評論』771号（三ツ井崇）
祇園祭の中世	**東国における武士勢力の成立と展開**
（紹）『年報都市史研究』21（辻浩和）	（評）『古文書研究』77号（江田郁夫）
京舞井上流の誕生	**日本中世政治文化論の射程**
（評）『國語と國文學』5月特集号（荻田清）	（紹）『地方史研究』368号
憲政常道と政党政治	**日本中世の社会と寺社**
（評）『年報政治学』2014-Ⅰ（清水唯一）	（評）『日本歴史』792号（海津一朗）
死して巌根にあらば骨も也た清からん	**室町幕府管領施行システムの研究**
（紹）「中外日報」6/13	（評）『ヒストリア』244号（呉座勇一）
神仏習合の歴史と儀礼空間	**老農・中井太一郎と農民たちの近代**
（評）『宗教研究』88巻1輯（蓑輪顕量）	（記）「しんぶん赤旗」4/13
住友の歴史　上巻	**近代日本の歴史都市**
（紹）『日本歴史』792号	（紹）『地理』5月号（上杉和央）

4月から6月にかけて刊行した図書

図　書　名	著　者　名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
料紙と書	島谷弘幸編	1748-9 C3070	5,800	4
歴史における周縁と共生	鈴木則子編	1714-4 C3021	6,800	4
住心院文書	首藤善樹・坂口太郎・青谷美羽編	1744-1 C3021	6,000	4
通天楼日記	冨坂賢・柏木智雄・岡塚章子編	1729-8 C3072	16,400	4
『作庭記』と日本の庭園	白幡洋三郎編	1746-5 C3021	5,000	4
在京大名細川京兆家の政治史的研究	浜口誠至著	1732-8 C3021	6,500	4
国際デザイン史（5刷）	デザイン史フォーラム編	1079-4 C1013	2,900	4
劇場の近代化	永井聡子著	1737-3 C3074	3,500	4
中世後期の香文化	本間洋子著	1733-5 C3021	8,200	5
死して巌根にあらば骨も也た清からん	児玉修著	1750-2 C0093	1,800	5
大徳寺伝来五百羅漢図	奈良国立博物館・東京文化財研究所編	1743-4 C3071	50,000	5
日本庭園像の形成	片平幸著	1718-2 C3070	4,000	5
怨霊・怪異・伊勢神宮	山田雄司著	1747-2 C3021	7,000	6
茶の湯 恩籟抄	戸田勝久著	1751-9 C1076	5,500	6

4月から6月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
大手前大学比較文化研究叢書	10	10	日仏文学・美術の交流	1745-8 C3090	2,800	4
金鯱叢書	40	40		1749-6 C3370	9,500	4
花園院宸記	23	34		1752-6 C3321	380,000	5
技術と文明	35	35	18巻2号	1753-3 C3340	2,000	5
浄土宗叢書	2	2	観経疏之抄『玄義分』下	1755-7 C3015	7,000	6
茶道古典叢書	6	6	御茶湯之記	1756-4 C3076	15,000	6
茶道古典叢書	7	7	片桐石州茶書	1758-8 C3076	15,500	6
講座　日本茶の湯全史	3	2	第2巻　近世	1697-0 C1076	2,500	6
新島襄を語る	13	別巻4	襄のライフは私のライフ	1757-1 C1016	1,900	6

（表示価格は税別）

営業部より

▼疲れている時は、ついつい手元のスマホをいじることがしばしば。気になるニュースとか断片的に知識を仕入れるのには良いのですが、体系立てて知識を蓄えるのはやはり不向き。そういう時は漫画で知識を蓄えていますが、これがなかなかビジュアルで記憶に残っていき、いまさらながら重宝してます。

考えてみれば、そもそも歴史に興味をもったきっかけが、小学生の時に読んだ漫画版の日本の歴史でした。繰り返し読んだため、今でも人物の顔などのイメージが鮮明に残っており、視覚イメージの重要性を再認識。今でもたまに頁をめくります。（I）

☆フェア情報

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

・TENDO八文字屋（山形県天童市）
・紀伊國屋書店新潟店（新潟県新潟市）
・今井書店グループセンター店（島根県松江市）
・芳林堂書店高田馬場店（東京都新宿区）
・ジュンク堂書店三宮駅前店（兵庫県神戸市）
・喜久屋書店阿倍野店（大阪市阿倍野区）
・ジュンク堂書店上本町店（大阪市天王寺区）

編集後記

▼今号は本来七月に発行するところ、当方の責により、大幅に遅れてしまいました。はやくにお原稿を下さった執筆者の先生方・関係者・読者の皆様に深くお詫び申し上げます。次号は平常通り一〇月までにはお届けいたします。（h）

▼富岡製糸場の世界遺産登録も追い風となり世は近代化産業遺産ブームです。『住友の歴史』下巻には近代大阪や新居浜の貴重な写真を収録！私のお気に入りは鉱山鉄道です。（M）

▼今夏は大雨で鴨川もかなり増水。しかしこの雨で、中州や河川敷、あらゆるところが洗い流されると、川がひときわ美しい。願わくば、次の大雨も無事に過ぎますように……（大）

▼ひどい雨に翻弄されるのは人間ばかりではないようで、鴨川が増水すると、上流からオオサンショウウオが流されてくるそうです。（m）

▼お盆を過ぎて少し秋の気配が感じられることにほっとしつつも、各地で豪雨被害に遭われた皆様に心より御見舞い申し上げます。（Q）

▼雨のなか五山送り火が行われました。込められた思いからか例年、雨天実施のようです。雨で霞む送り火に却って神妙になりました。（江）

▼表紙図版：「河合武雄扮する椿姫」（一九一一年四月帝国劇場にて、『演芸画報』一九一一年五月）／『日中演劇交流の諸相』より

おうとうつうしん
鴨東通信　四季報 No.94

2014（平成 26）年 8 月 31 日発行

発　行　株式会社 **思文閣出版**

〒 605-0089
京都市東山区元町 355
tel　075-751-1781
fax　075-752-0723
e-mail　pub@shibunkaku.co.jp
http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン　鷺草デザイン事務所

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年 4 回（4・7・9・12 月）刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください

料紙と書

東アジア書道史の世界

島谷弘幸（東京国立博物館副館長）編

東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究。

日本の書においては古筆や写経を中心に、中国や韓国の書においては装飾料紙を用いたものを中心とし、各国における書の時代変遷とともに中国や韓国からの影響といった点もふまえた書風の分析を行う。さらに、料紙装飾に関する科学的調査と、書の内容に関する文学的・歴史的に調査を行い、個別の作品を人文・自然諸科学の方法によって総合的に分析。図版篇では貴重な装飾料紙の文様を豊富な写真図版で紹介。

内　容

【図版篇】
舶載の唐紙／日本製の唐紙

【データ篇】
粘葉本和漢朗詠集 料紙装飾一覧
古今和歌集序（巻子本）料紙装飾一覧
和漢朗詠集巻下（益田本）料紙装飾一覧
古今和歌集（元永本）料紙装飾一覧

【論文篇】
古筆における伝統と創造―世尊寺家を一例として　島谷 弘幸
料紙について―古写経を中心に　赤尾 栄慶
「粘葉本和漢朗詠集」と「金沢本万葉集」にみる料紙の装飾と文様―雲母摺り文様の和様化の一過程の考察を含めて　太田 彩
中国書法史における装飾加工紙について　富田 淳
日本の料紙装飾の技法における受容と発展について　高橋 裕次
料紙を中心とした「平家納経」鑑賞の記録　恵美千鶴子
下絵装飾と書　島谷 弘幸

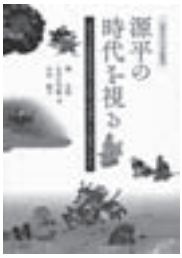
【4月刊行】　▼A5判・三五四頁／本体 五、八〇〇円

源平の時代を視る

磯水絵・小井土守敏・小山聡子編
二松學舎大学学術叢書

二松學舎大学附属図書館所蔵
奈良絵本『保元物語』『平治物語』を中心に

二松學舎大学東アジア学術総合研究所での共同プロジェクト「二松學舎大学附属図書館蔵 奈良絵本『保元物語』『平治物語』の翻刻と研究」。本書は、その研究の軌跡と成果をまとめた論集。



内　容

奈良絵本『保元・平治物語絵巻』について　（石川 透）

第1部　二松學舎大学附属図書館所蔵の奈良絵本『保元物語』『平治物語』の諸相

二松學舎大学附属図書館蔵奈良絵本『保元物語』『平治物語』について　（小井土守敏）
二松本『保元物語』挿絵についての一考察　（小森 正明）
二松本『保元物語』『平治物語』挿絵の天皇表現について　（山本 陽子）
描かれた『保元物語』『平治物語』の世界　（出口 久徳）
奈良絵本『平治物語』の大路渡　（小山 聡子）

第2部　奈良絵本と軍記物語

奈良絵本『保元物語』『平治物語』の襖絵について　（磯 水絵）
奈良絵本・絵巻『保元物語』における崇徳院像　（山田 雄司）
物語草子の制作と享受層　（恋田 知子）
『保元物語』『平治物語』の諸本展開と熊野信仰　（源 健一郎）
金刀本保元物語の合拗音振仮名と『落葉集』　（佐藤 進）
『愚管抄』と『保元物語』『平治物語』をめぐる試論　（麻原 美子）
源平盛衰記と絵画資料　（松尾 葦江）

▼A5判・二七八頁／本体四、八〇〇円

『作庭記』と日本の庭園

白幡洋三郎編

【4月刊行】

庭園は世界を映す鏡である――。日本最古の作庭理論書として知られる『作庭記』には、中世の人々の作庭技術のみならずその背後に宿る思想・美意識が反映している。そうした着想から企画され、「日本庭園を通した古代・中世的自然観」の発見を試みた国際日本文化研究センターのシンポジウム「日本庭園と作庭記」の成果。

内　容

日本庭園の「誕生」と『作庭記』の意義　白幡洋三郎

第Ⅰ部　始　原

華林園の記憶　多田伊織

祭祀と饗宴の庭　原田信男

臨池伽藍の系譜と浄土庭園　小野健吉

第Ⅱ部　創　造

『作庭記』原本の再生　飛田範夫

浄土庭園と『作庭記』と『祇園図経』　外村　中

『作庭記』にみる禁忌・陰陽五行・四神相応　水野杏紀

第Ⅲ部　成　立

名所を詠む庭園は存在したか　錦　仁

四方四季と三時殿　荒木　浩

鳥羽離宮庭園から見た鳥羽上皇の浄土観　鈴木久男

幻の庭園　原口志津子

第Ⅳ部　展　開

鎌倉時代における離宮および山荘と庭園　豊田裕章

南北朝時代の臨済宗幻住派・金剛幢下における境内空間　榎本　渉

露地考　陸　留弟

▼A5判・三六四頁／本体五、〇〇〇円

怨霊・怪異・伊勢神宮

山田雄司著

【5月刊行】

中世社会に大きな意味を持っていた怨霊・怪異の諸相を歴史的に跡づけ、さらには神仏をも射程に入れて集大成。

内　容

【1　怨霊】

第1章　怨霊の思想

第2章　怨霊への対処―早良親王の場合を中心として―

第3章　怨霊から神へ―菅原道真の神格化―

第4章　怨霊―『今昔物語集』の事例を中心に―

第5章　源頼朝の怨霊観

第6章　讃岐国における崇徳院伝説の展開

第7章　怨霊と怨親平等との間

【2　怪異】

第8章　鎌倉時代の怪異

第9章　平家物語・保元物語・平治物語の「怪異」

第10章　怪異と穢との間―寛喜二年石清水八幡宮落骨事件―

第11章　親鸞における神と鬼神

第12章　穢と不浄をめぐる神と仏

【3　伊勢神宮】

第13章　伊勢神宮の中世的意義

第14章　中世伊勢国における仏教の展開と都市

第15章　院政期の伊勢神宮と斎宮―怪異をめぐっての比較―

第16章　室町時代伊勢神宮の怪異

第17章　足利義持の伊勢参宮

第18章　国阿上人の見た伊勢

第19章　室町時代の災害と伊勢神宮

▼A5判・四四八頁／本体七、〇〇〇円

やまだ・ゆうじ…一九六七年静岡県生。三重大学人文学部講師を経て三重大学人文学部教授。

近江の古像

高梨純次著

滋賀県立琵琶湖文化館・県立近代美術館で、近江の仏像に関する展覧会の企画や調査・研究に30年以上にわたって携わってきた第一人者が、主に8世紀から11世紀の近江の古仏について、その研究成果を集大成する。

総説

第一部　近江の仏像の成立
—八世紀から九世紀における近江の仏像—

第一章　湖南市・善水寺金銅誕生釈迦仏立像について

第二章　長浜市木之本町・鶏足寺木心乾漆造十二神将立像の制作年代について

第三章　長浜市高月町・日吉神社木造千手観音立像をめぐって

第四章　己高山寺の草創

第五章　長浜市木之本町・鶏足寺木造十一面観音立像について

第二部　比叡山寺の仏像—延暦寺の草創から発展と造像—

第一章　円仁帰国後の延暦寺の造像について
—現存作例の検討から—

第二章　東近江市（旧蒲生町）・梵釈寺宝冠阿弥陀如来像の制作時期

第三章　長浜市木之本町・金居原薬師堂の木造伝薬師如来立像について

第四章　石山寺木造阿弥陀如来坐像について

第五章　長浜市木之本町・石道寺の造像

第六章　甲賀市甲南町・正福寺の金剛力士像とその周辺

第三部　近江の初期神像—仏像と神像の狭間で—

第一章　甲賀市・永昌寺木造地蔵菩薩立像について
—天台系僧形像についての一試論—

第二章　栗東市・金勝寺木造僧形神坐像について

第三章　米原市・惣持寺の木造天部形立像について
伊吹山、荒ぶる神の信仰と造形

【8月刊行】　▼A5判・四二〇頁／本体 九、〇〇〇円

たかなし・じゅんじ…一九五三年京都市生。滋賀県立琵琶湖文化館、滋賀県立近代美術館学芸課長を経て、現在公益財団法人秀明文化財団参事。

住心院文書

首藤善樹・坂口太郎・青谷美羽編

【4月刊行】

聖護院門跡の院家先達として、全国的に広大な霞を所有していた京都の住心院に現蔵される貴重な古文書や、出来る限りの旧蔵文書も採集し、若干の関連史料をくわえて、修験道史を研究する上で根本史料となる文書群二〇二点を活字化。

【収録文書】関東下知状／法輪院良瑜御教書／甲斐国武田氏熊野参詣交名写／今川氏親書状／聖護院道増書状／浅黄貝緒免許状／小山田信有書状／平手政秀書状／穴山祐清書状／今川義元書状／毛利元就書状／熊野参詣道先達代官職安堵状写／武田義信書状／持福院有誓・新熊野成慶連署書状草案／武田信玄書状／足利義昭御内書／徳川家康黒印状　他

▼A5判・二三〇頁／本体 六、〇〇〇円

天龍寺文書の研究

原田正俊編

京都嵯峨の天龍寺の古文書は、仏教史・寺院史のみならず朝廷・幕府発給の文書、荘園関係文書を含み、政治史・社会経済史研究に必須の文書群。中世天龍寺および関連諸塔頭文書を翻刻・掲載、解説・論考を収録。

▼A5判・七一六頁／本体 一四、〇〇〇円

鹿王院文書の研究

鹿王院文書研究会編

京都嵯峨の鹿王院伝来の古文書を集成、翻刻。**第一部　文書篇**　九一五点を編年で収録　**第二部　解題・研究篇**　鹿王院文書解題／春屋妙葩と夢窓派の展開／鹿王院領の構成と展開／鹿王院所蔵の「春屋妙葩像」／鹿王院と豊臣政権／近世の鹿王院の遠忌法会に関する一考察　形態別目録・文書目録・索引（人名・地名）　▼A5判・五三〇頁／本体 一三、〇〇〇円

室町幕府の東国政策

杉山一弥著

従来の中世東国史研究では、鎌倉公方を中心とした鎌倉府体制が注目されてきた。これに対し本書は、室町幕府の東国政策という視点から室町期東国社会をとらえ直し、その焦点を平時・戦時それぞれの東国の儀礼と秩序、東国における足利氏一族庶子の存在意義、室町幕府・鎌倉府の境界領域ならびに政治・経済的に競合する地域社会における諸階層の動向にあわせて再検討する。

第一編　室町期東国の儀礼と秩序
第一章　室町幕府における錦御旗と武家御旗
—関東征討での運用を中心として—
第二章　『鎌倉年中行事』にみる鎌倉府の着装規範
—鎌倉公方の服飾を中心として—
第二編　室町期東国の足利氏一族
第一章　稲村公方と南奥社会
第二章　篠川公方と室町幕府
第三章　堀越公方の存立基盤—経済的側面を中心として—
補　論　堀越公方と足利鑁阿寺
第三編　室町幕府の東海・南関東政策
第一章　室町幕府奉公衆葛山氏
第二章　室町幕府と甲斐守護武田氏
第三章　室町期上総武田氏の興起の基底—武田信長の動向を中心として—
第四章　室町期の箱根権現別当と武家権力
第四編　室町幕府の東北・北関東政策
第一章　室町幕府と下野「京都扶持衆」
第二章　室町幕府と常陸「京都扶持衆」
第三章　室町幕府と出羽大宝寺氏

▼A5判・三八八頁／本体七、二〇〇円

すぎやま・かずや…一九七三年生。國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期単位取得満期退学。博士（歴史学）。現在、國學院大學文学部兼任講師。

在京大名細川京兆家の政治史的研究

浜口誠至著

戦国期幕府の政策決定に参画した大名「在京大名」、中でも代表的な存在である細川京兆家の政治的位置を明かし、幕政の構造的特質を解明する。

▼A5判・三二八頁／本体六、五〇〇円

室町幕府管領施行システムの研究

亀田俊和著

応仁・文明の大乱以前の室町幕府における根幹の制度、管領施行システムの沿革と意義を分析し、その形成と展開を解明する。

▼A5判・五四四頁／本体九、八〇〇円

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

村井祐樹著

一次史料から謎に包まれた佐々木六角氏の実像を追求し、戦国期の畿内近国政治史を解明。戦国期佐々木六角氏関係記録類を網羅した史料集をも収録。

▼A5判・五三〇頁／本体一一、六〇〇円

戦国大名権力構造の研究

村井良介著

主に毛利氏を事例に、戦国大名、「戦国領主」の重層的な権力構造の分析から、戦国期の権力諸関係の特質を、理論的かつ実証的に描くことにより解明。

▼A5判・四五二頁／本体七、〇〇〇円

東国における武士勢力の成立と展開

東国武士論の再構築

山本隆志著

本領や寺社祭礼、宿、家政機関などとの関係から諸課題を具体的に考察。

▼A5判・三八四頁／本体六、五〇〇円

思文閣史学叢書

日本中世の領主一揆

呉座勇一著

南北朝内乱以降、あらゆる階層、あらゆる地域において一揆が結ばれたが、最初に時代を牽引したのは年貢公事の徴収者にして地域社会の治安維持者であった在地領主による一揆、つまり〈領主の一揆〉であった。したがって国人一揆をはじめとする〈領主の一揆〉は南北朝期以降の地域社会を規定する中心的な要素といえ、これまで多くの研究が積み重ねられてきた。本書はその蓄積の上に、〈領主の一揆〉の構造・機能・結合論理を解明し、新しい国人一揆論を提示しようと志す。

序　章　中世一揆研究の新視角

第1部　〈領主の一揆〉の構造と機能

第1章　伊勢北方一揆の構造と機能
第2章　隅田一族一揆の構造と展開
第3章　松浦一揆研究と社会集団論

第2部　〈領主の一揆〉と一揆契状

第4章　奉納型一揆契状と交換型一揆契状
第5章　親子契約・兄弟契約・一揆契約
第6章　契約状と一揆契状

第3部　戦国大名・惣国一揆への展開

第7章　領主の一揆と被官・下人・百姓
第8章　乙訓郡「惣国」の構造
終　章　南北朝～室町期の戦争と在地領主

▼A5判・三八〇頁／本体七、二〇〇円

ござ・ゆういち…一九八〇年東京都生。現在、東京大学大学院人文社会系研究科研究員。著書に『一揆の原理―日本中世の一揆から現代のSNSまで―』（洋泉社、二〇一二年）、『戦争の日本中世史―「下剋上」は本当にあったのか―』（新潮社、二〇一四年）。

中世の契約社会と文書

村石正行著

売買・貸借などを題材に、契約者双方の文書作成のあり方を検証。双方向の文書授受とそれにまつわる文書作成が一般的に行われていた可能性を示す。

▼A5判・三五二頁／本体七、五〇〇円

日本中世の社会と寺社

細川涼一著

律宗・律僧が中世社会で果たした役割を中心に、女性や被差別民など、境界領域から歴史を問い続けてきた著者の主要な研究成果を一書にまとめる。

▼A5判・四五二頁／本体七、七〇〇円

祇園祭の中世　室町・戦国期を中心に

河内将芳著

祇園会の見物という行為、神輿渡御の神幸路・御旅所と都市空間との関係、戦国期の祇園祭の再興の意味、「闘取」の実態を解明し、中世京都を考察。

▼A5判・三六〇頁／本体四、五〇〇円

天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史

三島暁子著

天皇家・将軍家の笙の御師範、地下楽人豊原氏の南北朝期から約一五〇年の活動に着目し、権威に密接にかかわった音の文化を論じる。

▼A5判・三六〇頁／本体六、六〇〇円

中世後期の香文化　香道の黎明

本間洋子著

香道の発生期の一次史料を基に、三條西実隆や志野宗信と香との関係、「香会」の具体的内容、香木献上や薫物・匂い袋の下賜を具体的に考察する。

▼A5判・四二六頁／本体八、二〇〇円

御茶湯之記（おんちゃのゆのき）

予楽院近衛家凞の茶会記

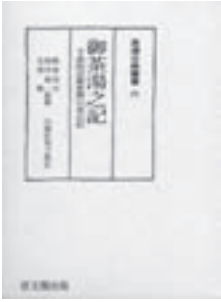
［茶湯古典叢書六］

監修　熊倉　功夫（静岡文化芸術大学学長）
　　筒井　紘一（今日庵文庫文庫長）
　　名和　　修（陽明文庫文庫長）
校訂　川崎佐知子（立命館大学文学部准教授）

◎『御茶之湯記』は、予楽院近衛家凞（一六六七～一七三六）が自家に客を招いて催した茶会の晩年二四年間（正徳三年～享保二一年）の記録で原本は京都・陽明文庫所蔵。家凞側近の者がそのつど記し遺したものと思われる。茶会の日付と場、客人、道具、献立が漏らさず書き控えられ、三〇八会にも及ぶ茶会が記録されている。

◎全文を忠実に活字化。記載される人名・道具・料理・植物・書画などの解説や他の記録との照合など、詳細な脚注・補注を付す。年譜ほか解説三篇、客人・道具・献立篇の索引も併載。

【内容】
カラー口絵／（翻刻）御茶湯之記
近衛家凞について（名和修）
『御茶湯之記』にみる懐石（熊倉功夫）
近衛家凞の茶会（筒井紘一）
『御茶湯之記』の書誌
　　および関連資料（川崎佐知子）
『御茶湯之記』関連年譜／索引



【6月刊行】　▼A5判・六一〇頁／本体一五、〇〇〇円

茶譜

［茶湯古典叢書五］

谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂

近世茶書としては最も大部にして体系的なものの一つである茶譜（全一八冊）は、確かな情報に基づいて茶の湯を分野ごとに再編集したもの。底本は西尾市岩瀬文庫蔵本。　▼A5判・総九二四頁／本体二〇、〇〇〇円

金森宗和茶書

［茶湯古典叢書四］

谷晃校訂

底本は金沢市立図書館藤本文庫蔵『茶道の書ホ』。陽明文庫蔵『金森茶道故実』にて校合。陽明本と国会本（流布本）の追加分を別途収録。所在が判明する全茶会記を収録。　▼A5判・四九〇頁／本体一二、五〇〇円

古田織部茶書（一）（二）

［茶湯古典叢書二・三］

市野千鶴子校訂

古田織部の茶道秘書を集成。（一）「宗甫公古職へ御尋書」「古田織部正殿聞書」、（二）「織部百ヶ条」「織部茶会記」「数奇道次第」「古織茶湯記」「古織伝」「茶之湯六宗伝記三」を収録。

（一）▼A5判・三七〇頁／本体六、二〇〇円
（二）▼A5判・四四二頁／本体八、二〇〇円

公家茶道の研究

谷端昭夫著

近世における「公家茶道」を取り上げ、その独自の形態、実態と特徴、茶道史における位置づけを考察し、茶が持つ文化の内実を深める。　▼A5判・三九四頁／本体六、五〇〇円

西鶴の文芸と茶の湯

石塚修著

井原西鶴は、じつは「わび茶」の美意識に強く影響を受けていた――西鶴の俳諧師時代から『好色一代男』・遺稿集にいたるまでの浮世草子作品をとりあげ、その影響関係を検証。　▼A5判・三一六頁／本体六、〇〇〇円

元伯宗旦の研究

中村静子著

【7月刊行】

「利休の孫」として知られる元伯宗旦――その生涯は病気がちで不分明な部分が多く、残された史料からは全体的な姿を解明することは難しい。徳川幕府体制が確立し、大名茶全盛を迎えた時代に、誰に仕えることなく自身の茶の湯を追求し続けた宗旦の姿を、多数の史料を丁寧に読み解くことで複眼的に究明する。

〔内容〕

第一章　元伯宗旦研究序説
宗旦をめぐる従来の研究／基礎的な諸史料／宗旦活躍時の時代背景

第二章　宗旦の生涯をめぐる諸問題
宗旦の祖父をめぐって／道安と少庵との関係／宗旦の病気と経済状態

第三章　茶の湯者宗旦形成にかかわる要因
宗旦と禅との関係／宗旦の茶の湯の土台となる利休の茶の湯

第四章　宗旦の茶の諸相
人的交流に見られる宗旦の茶の湯／宗旦の茶室／茶会記に見られる茶の諸相／侘びの道具　一閑張

第五章　宗旦の侘び茶
侘びについて／『本阿弥行状記』の隠逸の茶人に対する批判／「心の文」に見る芸道の理想の姿／中世芸道者の求めた風体／宗旦の求めた冷え枯れの風体／名人宗旦／宗旦の「軽み」

第六章　宗旦の後継者たち
宗旦の子供たち　三千家成立と宗旦の役割／宗旦の弟子衆

▼A5判・四三〇頁／本体 七、八〇〇円

なかむら・しずこ…東京都生。二〇一二年宝塚造形芸術大学（現宝塚大学）大学院博士課程修了。芸術学博士。裏千家正教授。専攻 伝統芸術。

茶湯古典叢書七

片桐石州茶書

谷　晃・矢ヶ崎善太郎校訂

【6月刊行】

『石州三百箇条』と称される茶書は、類似する書名で内容の異なる流布本が多く存在し、それらは石州が書き残したものをもとに弟子たちが解説をほどこした書物と考えられる。流布本を整理し、怡渓系・酔翁系・不白系の三系統からそれぞれ底本と校合本を選び翻刻・校合。あわせて『大工之書』の翻刻を収録。

内　容

翻刻凡例
石州三百箇条（翻刻）
　第一巻
　第二巻
　第三巻
　挿図
大工之書（翻刻）
　挿図
解題
谷晃
矢ヶ崎善太郎
索引

▼A5判・六五八頁／本体一五、五〇〇円

たに・あきら…一九四四年生。京都大学文学部史学科卒。野村美術館館長。芸術学博士。

やがさき・ぜんたろう…一九五八年生。京都工芸繊維大学大学院工芸研究科建築学専攻終了。同大学院工芸科学研究科准教授。学術博士。

近世の禁裏と都市空間

岸泰子著

禁裏が関係する信仰や儀礼の場・空間の特性に注目し、都市を基盤として存在した禁裏、禁裏によって形成・維持された都市、という両側面からなる近世京都の特性を中世・近代への展開も視野に入れて明らかにする。都市・建築史学の手法に限定することなく、近世京都の都市空間の特徴を多角的・包括的に論じた一書。

第一部 禁裏と信仰——内侍所・御霊社
（一）室町後期・戦国期の内侍所　（二）近世の内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について　（三）寛政度内裏以降の内侍所仮殿の造営・下賜と神嘉殿

第二部 禁裏と王権——穢・参詣
（一）中世後期の天皇崩御と触穢　（二）近世前期の天皇崩御と内侍所（三）近世禁裏御所と都市社会　補章（1）室町・戦国期における宮中御八講・懺法講の場　（2）近世安楽寿院の鳥羽法皇遠忌法会

第三部 禁裏と都市——造営・遷幸・祭礼
（一）承応度・寛文度内裏造営と非蔵人　（二）近世京都の都市空間再生と禁裏御所普請　（三）安政度内裏遷幸と都市空間
（四）近世前期の上・下御霊祭礼行列と天皇

きし・やすこ…一九七五年生。現在、九州大学大学院芸術工学研究院准教授。

▼A5判・三二〇頁／本体六、四〇〇円

幕末期の老中と情報

水野忠精による風聞探索活動を中心に

佐藤隆一著

【7月刊行】

水野忠精を題材とした老中の情報収集を軸に、同時代の他の事例も交えて、幕末期の老中による政治情報収集の実態とその情報内容、さらにはこれらの扱われ方を実証的に分析することで、基本的な老中の情報収集ルートの枠組を明らかにする。

悪戦苦闘と挫折をくり返しながらも国政を支え続け、結果的には敗者となった水野忠精ら幕閣の政治活動にも、明治新政府樹立への踏み台としての役割を認め、一定の歴史的評価を与える。

内　容

序　章　言葉としての「情報」と「風聞」「風説」
第1章　老中と情報に関わる諸問題
第2章　島津久光卒兵上京・江戸出府に関わる情報収集
第3章　将軍家茂上洛をめぐる情報収集
第4章　攘夷・鎖港問題をめぐる情報収集
第5章　元治の庶政委任と老中の往復書翰
第6章　禁門の変に関わる情報収集
第7章　長州藩・天狗党・外交問題に直面する幕閣と情報
第8章　水野忠精老中罷免をめぐる諸問題
第9章　彦根・土浦両藩とオランダ風説書

さとう・りゅういち…一九五六年東京都生。青山学院大学大学院文学研究科史学専攻博士課程単位取得済退学。現在、青山学院高等部教諭。

▼A5判・五二〇頁／本体九、五〇〇円

アーカイブズの構造認識と編成記述

国文学研究資料館編　【4月刊行】

人類が社会的な営みのなかで生み出してきた文書量は膨大である。アーカイブズは人類共有の知的遺産であり、その保存・公開を支えるアーカイブズ学はまさに諸学のための基礎学といえる。本書はとくに重要となるアーカイブズ群の構造的な理解（構造認識）とその表示（編成記述）について、第一編で研究動向や理論的な整理をし、第二・三編で近世・近代の多様な文書群をとりあげ実践的な議論を展開する。国文学研究資料館で行われた共同研究の成果。

内容

第一編　アーカイブズの編成記述――理論と動向
アーカイブズ機関における編成記述の動向と課題　太田　富康
アーカイブズの内的秩序構成理論と構造分析の課題　柴田　知彰
アーカイブズ編成・記述の原則再考　森本　祥子
第二編　アーカイブズの構造認識と編成記述論
日本近世・近代在地記録史料群の階層構造分析方法について　渡辺　浩一
商家文書の史料群構造分析　西村慎太郎
名主家文書における文書認識と目録編成　工藤　航平
近現代個人文書の特性と編成記述　加藤　聖文
組織体の機能構造とアーカイブズ編成　清水　善仁
第三編　近世の記録管理とアーカイブズ
転封にみる領知支配と記録　大友　一雄
近世の商家と記録管理　西向　宏介
萩藩士家における「御判物・御証文」の保存と管理　山﨑　一郎
近世石清水八幡宮の神人文書と文書認識　東　昇
近世アーカイブズの紙質調査と組織体の料紙　青木　睦

▼A5判・四〇〇頁／本体六、七〇〇円

通天楼日記

横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷

冨坂賢・柏木智雄・岡塚章子編　【4月刊行】

黎明期の日本写真史・洋画史・印刷史の実態を明らかにする一級の史料群である、横山松三郎（一八三八～八四）が上野池之端に開業した写真館兼私塾・通天楼での出来事を記した「通天楼日記」の翻刻と影印等を収載。

「横山松三郎は、洋画の開拓者高橋由一や写真史に名を残す島霞谷と同様、没するまで確乎たる洋画家でありつづけた。画像の近世的至福性と統一性を客観的に破壊する写真技術の先駆者たる横山が、なおかつ洋画にしか求め得なかった迫真性を起える美とはなんだったのか、これら画像資料を歴史学的に考える上での不可欠な史料として私は本書を推薦する」　【宮地正人氏　推薦文より】

―内　容―

【史料翻刻】明治六年通天楼日記／明治七年通天楼日記／明治十二年日記／横山松三郎自筆手記／横山先生履歴草稿
【通天楼日記　影印】
【論考】横山松三郎と通天楼―「明治六年通天楼日記」を素材として（冨坂賢）／通天楼をめぐる人々―洋画とのかかわりを中心として（柏木智雄）／横山松三郎事績―横山家所蔵資料を中心に（岡塚章子）

とみさか・けん（九州国立博物館学芸部文化財課長）
かしわぎ・ともお（横浜美術館学芸グループ長）
おかつか・あきこ（江戸東京博物館学芸員）

▼A5判・六〇二頁／本体一六、四〇〇円

日中演劇交流の諸相

――中国近代演劇の成立――

陳凌虹著

【8月刊行】

日本の明治期、中国の清末民国初期における日中演劇界の緊密な連携関係、とりわけ中国の近代演劇の成立に果たした日本の役割について、両国話劇のはしりである文明戯（中国）と新派（日本）の関係を中心に、多数の新史料と具体的な事象（人物の往来、脚本の翻訳、舞台芸術）を通して総合的に論じる。

―内　容―

第一章　日中近代演劇の展開
近代化と演劇改良／新演劇の誕生／新演劇の担い手と享受者

第二章　新演劇のネットワーク（一）―政治・戦争と演劇の蜜月―
新演劇と自由民権運動、日清戦争／文明戯と維新変法、辛亥革命／文明戯と京都―任天知進化団と静間小次郎一派の明治座興行―

第三章　新演劇のネットワーク（二）―日中に咲くメロドラマの花―
日中に咲くメロドラマの花／「椿姫」「茶花女」「新茶花」―日中における演劇「椿姫」の上演とその意味―／「不如帰」と「家庭恩怨記」―そのメロドラマ的性格をめぐって―

第四章　舞台芸術としての新派と文明戯
役者研究―「女形」と「男旦」―／劇場研究―近代新式劇場の登場―／新演劇の統合機関―東京新派俳優組合、新劇倶進会―

第五章　文明戯と日本の新劇運動―春柳社と民衆戯劇社を中心に―
春柳社と新劇／民衆戯劇社の自由劇場運動と日本

▼A5判・四一八頁／本体八、〇〇〇円

ちん・りょうこう…一九七九年中国雲南省生。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了。学術博士。華東師範大学専任講師。

劇場の近代化

帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場

永井聡子著

【5月刊行】

明治・大正・昭和初期における劇場の近代化に大きな影響を与えた三つの劇場、帝国劇場（明治四四年開場）・築地小劇場（大正一三年開場）・東京宝塚劇場（昭和九年開場）を取り上げ、当時のさまざまな言説、図版、写真、インタビューなどの資料を読み解き、西洋の劇場近代化過程とも比較しながら日本の劇場の近代化の特色を描きだす。

◎内容◎

第1章　帝国劇場以前の歌舞伎劇場に見られる近代化
第2章　帝国劇場に見られる近代化
第3章　築地小劇場に見られる近代化
第4章　東京宝塚劇場に見られる近代化
第5章　帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場に見られる「劇場」の近代化

ながい・さとこ…名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了（工学博士）。現在、静岡文化芸術大学文化政策学部准教授。

▼A5判・二三〇頁／本体三、五〇〇円

「日本庭園像の形成」

片平幸著

「日本庭園」は西洋でどのように理解され、解釈されたのか、そして日本はそれに対してどのように反応したのか。
一九世紀末から二〇世紀初頭の欧米人の日本庭園論、それへの日本人の反応、という両者の「往還」を丁寧にたどり、一九三〇年代に至って日本庭園の「独自性」が規定されていく過程を追う。

●内　容●

序　章　「日本庭園」に注がれる西洋からの眼差しと日本側の応答
第1章　ジョサイア・コンドルの日本庭園論
第2章　日本の庭と欧米人の眼差し
第3章　欧米における日本庭園像の形成と原田治郎の The Gardens of Japan
第4章　庭園をめぐる一九三〇年代の言説空間
第5章　日本庭園像の形成――「独自性」と「芸術性」の確立へ
最終章　西洋における日本庭園論のパラダイム・シフト

【5月刊行】　▼A5判・二四〇頁／本体四、〇〇〇円

かたひら・みゆき（本名：真鍋幸）…一九七一年生。ロンドン大学修士課程修了。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻後期博士課程修了（学術博士）。桃山学院大学国際教養学部准教授。

日仏文学・美術の交流
―「トロンコワ・コレクション」とその周辺―

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

大手前大学比較文化研究叢書⑩

一七世紀に設立された歴史あるパリ国立高等美術学校と大手前大学との提携記念として開催された「日仏文化交流シンポジウム」の成果。明治二七年から明治四三年にかけて日本に滞在、多くの和本や美術品を蒐集、研究したE・トロンコワのパリ国立高等美術学校所蔵コレクションを柱に、日仏美術の交感を論じた七篇を日仏両言語で収録。カラーを含む図版を多数掲載。

欧米の美術館・博物館が所蔵する京焼について　岡　佳子
――一七世紀を中心に――

ロカイユ様式と東洋　マリ＝カトリーヌ・サユット
――一八、一九世紀フランスの蒐集家たちに見る趣味のアヴァンチュール――

マラケ河岸の「スイ＝チュウ＝カ」　エマニュエル・シュヴァルツ
――パリ美術学校と明治期の日本――

フランスにおける日本学の草分けレオン・ド・ロニーについて　クリス・ベルアド
――ロニーの日本文化紹介をめぐって――

フロベールとボザール教授ボナ　柏木加代子

トロンコワ・コレクションの花扇使者図について　盛田帝子

エマニュエル・トロンコワの和本コレクション　クリストフ・マルケ
――一九世紀フランスにおける江戸出版文化史を構築する試み――

【4月刊行】　▼A5判・二八四頁／本体二、八〇〇円

ミシンと衣服の経済史

地球規模経済と家内生産

岩本真一著

一九世紀後半から二〇世紀半ばにかけて、シンガー社のミシンは世界を席巻し、東アジアはその最終市場であった。こうした状況下でのシンガー社の日本進出を中心に、近代日本におけるミシンの普及と衣服産業の展開を分析。衣服産業については工場内生産のみならず家内生産にも視野を広げ、これまで断片的にしか知られてこなかった近代日本衣服産業の概要と特徴を明らかにする。

序　章　問題の所在と本書の課題

第1部　ミシンの特質と普及過程

第1章　繊維機械としてのミシン
第2章　ミシン多様化の意味
第3章　ミシンの東アジアへの普及
第4章　近代女性の共時性と衣服商品化の波
第5章　日本のミシン輸入動向と普及経路

第2部　衣服産業の形態と展開過程

第1章　衣服産業の類型
第2章　衣服産業の地域分布
第3章　中規模工場の経営動向
第4章　製帽業の構造と展開
終　章　ミシンと衣服の経済史

いわもと・しんいち…一九七〇年奈良県生。大阪経済大学日本経済史研究所研究員。

【7月刊行】　▼A5判・三二八頁／本体六、〇〇〇円

軍医森鷗外のドイツ留学

武智秀夫著

【7月刊行】

文豪・森鷗外が青年時代にドイツへ留学したことはよく知られている。その間、さまざまな文化・文献に接し、留学がのちの大文豪になる糧となったのは数多くの研究が明らかにするとおりである。しかしドイツ留学の目的は文学でなく、陸軍医事制度調査と衛生学研修であった。本書は医学史の立場から、軍医としてドイツに渡った青年森鷗外の留学の実態を明らかにする。

内　容

第1章　津和野
第2章　医学を学ぶ
第3章　その時代の衛生学
第4章　陸軍軍医部に入る
第5章　『醫政全書稿本』十二巻
第6章　留学が決まるまで
第7章　出発からベルリンまで
第8章　ライプチッヒ
第9章　ライプチッヒ時代の軍事研修
第10章　ドレスデン
第11章　ミュンヘン
第12章　ベルリン
第13章　帰国の途へ
第14章　エリス

▼A5判・三五二頁／本体三、〇〇〇円

たけち・ひでお…一九三〇年、愛媛県松山市生。医学博士。元岡山大学助教授。日本医史学会会員、森鷗外記念会理事。

三河 風外本高墨蹟集

虚心坦懷

小原智司著

江戸後期の曹洞僧・風外本高――その画禅一如、書禅一如の境涯に傾倒し、長年にわたって作品を蒐集、さらに歴住地を訪れ研究した著者が、みずからのコレクションを中心に新発見を含む風外作品約百点をカラー図版で紹介。寺院や公共機関など、現在作品が多数集まる「三河の風外」を顕彰し、虚心坦懷に生きた生涯を現代人に問う。

【内　容】

序（川口高風）
はじめに
風外和尚の足跡を尋ねて
◆絵画と書◆
図版
◆資料篇◆
三物
贋作
風外本高年譜
参考資料・文献
編集を終えて
掲載図版リスト

小原智司（おはら・ちし）
一九四四年愛知県生。豊橋市西光寺住職。駒澤大学大学院修士課程修了。曹洞宗大教師。

【8月刊行】

▼A4判・一六〇頁／本体三、〇〇〇円

写しの力

創造と継承のマトリクス

島尾新・彬子女王・亀田和子編

模写を原本に劣るものとして捉えるのではなく、日本美術における模写の伝統をさまざまな角度から再検討する試み。ハワイ大学での国際シンポジウム『Utsushi』の成果10篇。

▼A5判・二七八頁／本体四、〇〇〇円

宗達伊勢物語図色紙

羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会 編

現存する59面のすべてをカラー、原寸大で掲載し、詳細な個別解説を付す。新たな知見を含め宗達伊勢物語図色紙の全体像と特徴を明らかにした一書。

▼B4判変型・二二〇頁／本体一九、〇〇〇円

没後二二〇年 蕪村

逸翁美術館・柿衞文庫編

南画・俳画・嫁入手・扇面・草稿・短冊・書簡など、新出作品もふくめ全一七六点を解説を付してカラーで収録。書簡については巻末に翻刻・解説を併載。

▼A4判・二一〇頁／本体二、二〇〇円

田能村竹田基本画譜 ［全2巻］

宗像健一 編著

図版篇には厳選された一四〇点の作品を大型図版で、解説篇には総論と基本作品の詳細を極めた個別解説のほか、題詩・落款・印譜・年譜などを収録。

▼B4判変型・総三九八頁／本体二八、〇〇〇円

室町水墨画と五山文学

城市真理子著

室町時代の詩画軸における詩と絵画の関係、禅林での制作行程、禅僧の文人意識の絵画への反映を論じ、詩文僧による〈詩画軸制作システム〉を解明。

▼A5判・三三六頁／本体六、〇〇〇円

大徳寺伝来五百羅漢図

奈良国立博物館・東京文化財研究所編

※中国・南宋時代の寧波周辺の地において、淳熙五年（一一七八）からほぼ十年をかけ、全百幅が制作された「大徳寺伝来五百羅漢図」。卓抜した画技と豊かな彩色を誇る中国・南宋時代の仏教絵画を代表する名品として知られる。また画中に金泥で記された銘文により、制作背景・当時の社会状況が判明する点でも極めて貴重な資料。

※奈良国立博物館と東京文化財研究所との共同調査の報告書をB4判に増補改訂。論文・参考資料を追加・加筆のうえ、高精細カラー印刷にて公刊。

詳細パンフレットを無料送付いたします。
パンフレットは小社HPにもアップしています。

南宋時代の仏教絵画を代表する優品

大迫力の大型図版を高精細カラー印刷

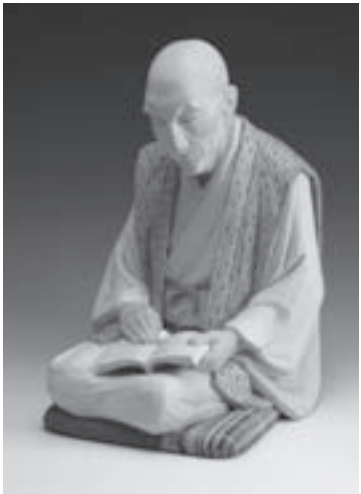
◎大徳寺所蔵の八二幅に、米国の美術館所蔵分（一二幅）・江戸時代の補作（六幅）も含め、全百幅を大型図版で紹介。
◎一点一点に画題と解説を付す。
◎部分拡大図（四〇点）・絹目画像（一七〇点）も高精細カラー図版で収録。
◎本調査により新たに存在が多数確認された銘文画像（四八点）を翻刻とともに掲載。
◎最前線の研究者による論文八本を収録。
◎伝来史料・年表・関連図版など、資料も充実。
◎美術史研究はもとより、東アジアの文化史・宗教史を考えていく上で大きな役割を果たす大著。

【6月刊行】
▼B4判・三一二頁／本体 五〇、〇〇〇円

――思文閣グループの逸品紹介――

美の縁

び　よすが



平櫛田中の故郷である岡山県では若き日の良寛が修行時代を過ごしたと言われ、そのような縁からであろうか田中はその生涯に多くの良寛像を制作している。これらの作品は良寛が自ら描いた自画像を基にしていると思われ、田中はそこに描かれた面長の顔、すっと通った鼻筋、切れ長の目などを破綻なく立体で表現している。

田中の木彫の特徴といえば徹底した写実表現と、その彩色にあると言える。しかし、十八世紀の哲学者ヘルダーが色彩は形ではないので彫刻には不要と断じたように、近代の西洋では彫刻への彩色は否定的に捉えられる向きが強く、その影響を色濃く受けた明治中期以降の日本木彫界では無彩色の写実彫刻が主流となり、彩色像は前近代的なものとして軽んじられていた。そのような環境下で、田中はわが国の仏像や寺社の装飾彫刻には古くから彩色が施されていたことに立ち返り、近代的写実彫刻と彩色の融合という新たな表現へと挑戦したのである。

また、田中畢竟の大作として知られる鏡獅子の制作においても、まず裸形の試作を行ない衣服の中にある人体構造の正確な把握に努めたように、田中彫刻ではその外観のみの再現に留まらず像主の存在までをも彫り出そうとしている。本像を背中から眺めたときにも、着衣の中には老人特有の背を丸めた痩せた小さな体が確かに感じられ、その卓越した表現には鬼気迫るものすら感じられる。

（ぎゃらりぃ思文閣・扇谷映）

❖沙門良寛❖

平櫛田中

思文閣墨蹟資料目録

和の美

古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合せください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001　FAX(075)531-5533
http://www.shibunkaku.co.jp/
info@shibunkaku.co.jp

スマートフォン・タブレット専用
思文閣の査定申込みアプリ

丁寧なガイダンスとカンタン操作で、査定申込みをお手伝いします。
思文閣の専門スタッフがお手持ちの作品を丁寧に拝見、後日査定結果をお知らせいたします。

無料配信中

「美術品査定」で検索、無料ダウンロード

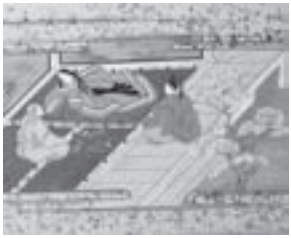
Available on the App Store　ANDROID APP ON Google play

〒605-0089　京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
tel: 075-531-0001　satei@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/arts/

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年４回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



奈良絵本
竹取翁物語　全二帖

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005　FAX(075)525-7155
http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

黒田征太郎 コヨーテ展

平成二十六年夏～秋、ぎゃらりぃ思文閣・思文閣銀座にて、クレヨン、水彩、コラージュetcで描かれた千姿万態のコヨーテをご覧いただけます。皆様のお越しをお待ちしております。

※会期詳細はウェブサイトをご覧ください

ぎゃらりぃ思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001　gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/